

新子の川柳行路

花の結び目

時実新子



花の結び目—新子の川柳行路

朝日文庫

1988年4月20日 第1刷発行

定価400円

著 者 時実新子

発行者 八尋舜右

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131 (代表)

編集=図書編集室 販売=出版販売部

振替 東京0-1730

© Shinko Tokizane 1988 Printed in Japan

ISBN4-02-260503-0

の結び目

の川柳行路

時実新子

朝日文庫

花の結び目——新子の川柳行路

目次

一の章

吉井川河口に生まれ育つ。少女時代に知る地獄篇。戦時下の女学校生活。敗戦・破恋、新たな地獄に嫁いで嫁・妻・母となる十代の新子。そして知った、川柳の魅力。

二の章

「伸びよ新子」——徳三の励ましを受けて新子は己れの表現を解放し翔び立とうとする。作家としての自意識が昂揚し奔放さもまた烈しく——女・新子の句の世界へ。

三の章

波が寄せ怒濤となつてうねり狂う中で吐瀉し慟哭する表現。新子句の昂まりが招く数多の批難、罵評。強靱な詩魂が既成川柳を支配する男社会とのたたかいを開始する。

四の章

女を、愛を、人生を——凝縮・観照させて生まれる新子の句。讃辞と嘲笑の渦の外で「新子」をわがものとする人々が

着実にひろがっていく。二十代から三十代への表現の昂揚が句集『新子』に結実して、波動はさらにうねりを呼ぶ。

五の章

句集『新子』への評価が広まり高まる。強烈な個性をもって現代川柳の創造と確立に生命を燃やす作家たちとの出会い。協同と確執、連帯と崩壊の時代の中で新子の表現はいよいよ燃焼し、研ぎ澄まされていく。

六の章

川柳における批評とは何か、作家とは何か。川柳界の錚々、俳人・詩人の新子観、作品論を貪欲に取捨して撰る新子。路郎、「番傘」と吟一、晋介、蒼之助、俊平、芳味等の個性と動き、新子の反応。

七の章

既成と訣別して新子は自立する。「川柳展望」——新子個人誌に集う作家たち。人と人との結び目の貴さを自覚する展望集団は、号を重ね事務所を持ち、やがての飛翔を準備する。

八の章

句集『月の子』上梓。作風・作品に人生の年輪が加わる。人間・生と死、生身で生きる現実・存在への観照に底抜けの樂觀（必死のおかしみ）——が働き始めた新子。

九の章

あらためて考える、川柳とは何か。古川柳から明治・大正、新興川柳運動、いわゆる六大家の道跡を辿りつつ今日到達した現代川柳の特質。作家をめざす人びとへの容赦ない直言。

十の章

「川柳展望」の作家たち。凝縮と瞬発の一句にいのちを削る表現の修羅場「展望」の中で、現代川柳の俊英たちは育つ。作家と作家、選者と作家の格闘の糸を掴み、結ぶ。「展望」作家の作品紹介。

十一の章

古（伝統）川柳の三要素を克^こえて新子が提唱する現代川柳の

六要素。さらに投げかける現代川柳界への六つの提言。今日の作家に問われる姿勢・方法が鮮やかに示される。

十二の章

女がものを書く人生とはどういうものか。父の母、母の母、そして母——書くという表現を持たずに生きた血のつながる女たち。——川柳を「いのち」とする新子はいま、ふかぶかと己れひとりの生と死を考える。希うのは「川柳新子の墓」。

『花の結び目』に寄せる

——解説にかえて

大野 進

あとがき

文庫のためのあとがき

花の結び目——新子の川柳行路

一 の 章

吉井川河口に生まれ育つ。少女時代に知る地獄篇。戦時下の女学校生活。敗戦・破恋、新たな地獄に嫁いで嫁・妻・母となる十代の新子。そして知った、川柳の魅力。

吉井川は感情の激しい川である。それも、河口なら尚更に激しかった。

岡山県を南北に貫く一級河川。それが児島湾に注ぐ辺りは向う岸も霞む広さで、海と呼ぶほうがふさわしかった。かなり大きな機帆船が錨を下ろし、浚渫船が掘り上げる上質の砂を積んでは大潮を待つて大阪方面へ出て行った。

潮が引くと洲が現われ、シジミや浅蜊あさりや蛤が採れた。雁木（道から河へ下りる段、多くは石で作つてあつた）の水苔を食い競う赤い小蟹、水から出た石には青海苔や牡蠣も付いていて村人を喜ばせた。

満ちてくる潮の速さ、打寄せる波は忽ちに雁木を二段三段と呑み、その豊かな水量は道を洗うかに見えた。はぜ、鰈、ふぐ、稀には岸から黒鯛ちぬが釣れたりもして、吉井川河口は河と海の複雑な貌かおを持っていた。

この河が荒れ狂うときの凄さを何にたとえようか。上流から矢のように海へ出ようとする濁流は木を流し、藁屋根を流し、牛を流し、それでも足りずに向う岸を噛んでは河辺の家を呑み込んだ。雨台風が通り過ぎたあとの吉井川のこの光景を待つために、私は台風の雁木に佇つてはよく叱られたものである。嵐の河は子供を攫さらうことぐらい何とも思つてはいなかった。雁木にしがみついて私は沖の白い牙に見惚れた。

冬、薄氷の張った葦の間あいから、かいつぶりが顔を出す。アミと呼ぶ小海老、それを追うマカリという岡山特産の魚。あんまり美味しいので隣へ飯まを借りに行つたことから付いた名

だという。そのママカ리를追う村人の声がひとしきり河の朝を賑わわせた。

この吉井川に小雪が舞う日、小児井さんという肥った産婆が額に汗を浮かべながら川土手を自転車で走っていた。昭和四年一月二十三日のことである。

こうして私の生は始まった。未熟児で栄養失調。ありあまる母乳を吐き戻す赤児を、母は九人の医師に診せたというが、どの答も学齡期まではもつまいということであったそうなの。生まれながらに生を拒否した私には乳児期の写真が一枚もない。それどころではなかった母の日々が察しられる。

そんな私が救われたのは身寄りもなく村の堂守りをしていた一人の婆さまの力に依る。婆さまは泣き声も涸れた赤児を膝にのせて終日呪文を唱えた。私の記憶の中に「アビラオンケンソワカ」という言葉とビンツケ油の匂いがあるところをみれば、この呪文は三歳近くまで続けられたのではなからうか。爪の間から白い煙のような虫が出て行って、私は次第に生氣を取り戻したのだと、まわりの人みんなの証言であるから信じざるを得ない。

五歳のころだったと思う。私は何か巨きな力おほきなを五体に感じた。その「力」に対して幼い私
が手を合わす。長い祈りをつぶやく。この光景は家族にとってよほど奇異に映ったと思うのだが、海に向かって、寢床の上で、私は所かまわず「巨大な力」に祈りを捧げた。そうすることによってしか安心できぬわずか五歳の魂を、私は今、客觀的に見て哀れと思う。しかも

現在、私はまだこの「力」から解放されてはいない。同行二人という遍路笠とも違う、私の他力本願。『歎異抄』も読んでみたがそれとも異なる。

生を拒否し再び生を受容した時から、私はこの業を負うたのであろう。自力を信じ颯々と生きている人を見るとき、私はその強韌きょうじんな精神と実行力に舌を巻く。「私は流れの中の桃」——巨大な力が私を押すというのではないが「自然」「宇宙」「神仏」「靈魂」、そのどれとも違う「私だけの信じ得る力」が働くのだ。自分にわからぬぐらいだから他人様に理解を求める無理を承知でくどくどと書いたのは、後年、私の川柳にもこの力が至るところに出没する。私の川柳の原点かもしれないと思うゆえである。

さて、医師の言葉に反して元気に小学校に入った私は、六年間にわたって罰を受けることになる。一口に言って、小学校時代は私の地獄体験その一に当たる。

いじめられっ子にはいじめられるだけの要素があるのだと人は言う。そうであるかも知れぬ、多分そうであろう。しかし、もし、そうでなかったとしたら、私はなぜに地獄の責め苦を受けなければならなかったのか。

当時私の父は家族と離れて一人神戸に居た。兵庫県巡査を拝命したかと思えば南海電車に乗ったり、外国航路の叔父宅に居候して夜学に通ってみたり。

父は都会暮らしの好きな伊達男であった。というのが、父は貧乏士族の母と醤油造りの父

との間にできた一人息子で、多分にその父親の血を享けたのでないかと思われる。父の父、つまり私の祖父は「ほら、今業平が通らっしゃる」と人々が振り返ったほどの美男で、ぞろりとした着流し姿は小豆島の噂の的であったそう。貞淑を絵に画いたような祖母がいくらか尽くしてみたところで、遊興三昧の祖父の金遣いに及ぶべくもなく、祖父は身上を食いつぶして二十七歳の若さで世を去っている。幼い子には親の道楽は見えない。従って私は、私の父が神戸でどんな生活をしていたのか知るすべもないが、父は時計、靴、バックルに至るまでの舶来好みで、母を連れて田舎に戻ったものの、すぐに都会が恋しくなったのではあるまいか。

一方、母は招かれざる嫁（父と母は神戸で恋愛結婚をしていた）ではあったが、田舎の水が性に合っただけの別居暮らしであったと思われる。しかし、父も人の子、人の親、さすがに岡山県九蟠村に残した二人の女の子は忘れかねたとみえて、ハイカラな服や学用品が次々に届けられた。この頃まだ二十八歳の母は平凡で化粧ツギ一つなく、姑と子供のために小店を張っての働きづめであった。昭和六年に始まった戦争もまだ遙かな銃後の昭和十年の村の春であった。

私が村の子供たちよりもハイカラな服や靴を身につけていたのがいけなかったのか。

私が彼等より勉強が出来たからなのか。

私が小さな女の子のくせにどこか生意気だったのか。